



Title	＜翻訳＞アルムアッラカート試訳（Ⅱ）：タラファ
Author(s)	池田，修
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2004, 4, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105860
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムアッラカート試訳 (II)

— タラファ —

池田 修*

1.

طَرَفَةُ Ṭarafa の本名は سَعْدُ بْنُ سُفْيَانَ بْنِ مَالِكٍ ‘Amr b. al-‘Abd b. Sufyān b. Sa‘d b. Mālik (およそ543-569) で、ペルシャ湾に臨むアルバハレーンとヤマーマに拠った بَكْرُ بْنُ وَائِلٍ Bakr b. Wā’il 族の出身であった。父 الْعَبْدُ بْنُ سُفْيَانَ al-‘Abd b. Sufyān は詩人、母は وَرْدَةُ بِنْتُ عَبْدِ الْمَسِيحِ Warda bint ‘Abd al-Masih と呼ばれ、双方とも名門の出であった。父も母方の祖父もともに詩人であり、父方の伯父 الْمُرَقَّشُ الْأَكْبَرُ al-Muraqqash al-Akbar と الْمُرَقَّشُ الْأَصْغَرُ al-Muraqqash al-Aṣghar、および母方の伯父 الْمُتَلَمِّسُ al-Mutalammis も有名な詩人であった。

幼くして父を失ったタラファは伯父たちに養育されたが、冷たくあしらわれた。彼らが母ワルダの相続すべき遺産を奪おうとしたとき、年端もいかぬタラファは天賦の詩才を発揮して、次のような詩を詠んで脅迫した¹⁾。

مَا تَنْظُرُونَ بِحَقِّ وَرْدَةٍ فِيكُمْ صَغَرَ الْبَنُونَ وَرَهْطَ وَرْدَةَ عَيْبٌ
قَدْ يَبْعَثُ الْأَمْرَ الْعَظِيمَ صَغِيرُهُ حَتَّى تَضِلَّ لَهُ الدَّمَاءُ وَتَصَبَّبُ

あなた方の間でワルダの権利をどうしようと期待するのか。

子供たちは小さく、ワルダの身寄りはないのだ。

小事が大事を惹き起こすこともある。

やがて血がとめどなく流れるかもしれない²⁾。

タラファは幼少にして詩才を発揮し始めていたことを物語る逸話が次のように伝えられている。ある日、彼は伯父アルムタランミス (الْمُسَيَّبُ بْنُ عَلَسٍ al-Musayyab b. ‘Alas とする説もある) が³⁾、

وَقَدْ أَتَنَاسَى الْهَمَّ عِنْدَ أَخْتِضَارِهِ يَنَاجِ عَلَيْهِ الصَّبِيرَةَ مُكَدِّمَ

悲しみが襲いかかるとき、私は首に焼印のある遅しくて足の速い雄
ラクダに跨ることで気を紛らわす⁴⁾。

* 四天王寺国際仏教大学 客員教授

1) Max Seligsohn, *Diwān De Ṭarafa*, p. 102.

2) 伴康哉訳。

3) *Diwān De Ṭarafa* 序文, p. 4.

4) 伴康哉訳。

と詠んだところ、仲間と遊んでいるタラファが、

قَدْ اسْتَنَوَقَا الْجَمَلَ 彼は雄ラクダを雌ラクダと誤った。

と叫んだ。すなわち、ムタランミスが用いた「صَيْعَرِيَّةٌ ṣay'ariyya (首に焼印があるラクダ)」というのは、雌ラクダに限られていたのである。少年に揶揄されたアルムタランミスは、

وَيْلٌ لِهَذَا مِنْ هَذَا 此の舌のために災いが奴に降りかかる。

とわめいたとのことである。

タラファが最初に詩を作ったのは7歳のときで、伯父に連れられてヒバリ狩りに出かけた日のことであつた。当時、アラブはヒバリ (قَنْبُرَةٌ qunbura) を珍重していた。一行は水辺に着いて、草むらに罟を仕掛けた。しかし終日待ったが、ヒバリは飛来せず、一羽も捕らえることができなかった。そこで一同は荷物をまとめて馬に乗って引き揚げた。その頃になってヒバリが飛んできて、撒き餌をついばみ始めた。これを見て、タラファは次の即興詩を作った⁵⁾。

يَا لَكَ مِنْ قَنْبُرَةٍ يَمْتَعِمِرُ خَلَا لَكَ الْجَوْ فَيُضِي وَاضْفَرِي
وَنَقَرِي مَا شِئْتَ أَنْ تُنْقَرِي قَدْ رَحَلَ الصَّيَادُ عَنْكَ فَأَبْشِرِي
وَرُفِعَ الْفَخُّ فَمَا تَحْذَرِي لَا بُدَّ مِنْ صَيْدِكَ يَوْمًا فَاضِيرِي

緑豊かな草地を飛び交うヒバリよ、
辺りに人影はなく、卵を産み、さえずるがよい。
欲しいものを自由についばむがよい。
罟は外されたゆえ、もはや気遣うものはない。
何時の日か捕えられるが、辛抱するがよい。

タラファは成長するにつれて酒に溺れ、乱費癖がついた。費用がまかなえる間は友人らに気前の良いところを見せたが、手元不如意になると友人らは去り、ついには親族にも見放され、部族から追放されるに至った。この結果、若い情熱を傾けたタミーム (تَمِيم Tamīm) 族のハウラ خَوْلَةُ Khawla という女性との離別を余儀なくされ、深い悲しみに打ちひしがれた。彼は砂漠を放浪する間、彼女のことを思つて長詩を作ったが、それが彼のムアッラカ (مُعَلَّقَةٌ mu'allaqā) の冒頭で次のようになっている。

١- لِحَوْلَةَ أَطْلَالٍ بَرْقَةٍ تَهْمِدُ تَلُوحُ كَبَاقِي الْوَشْمِ فِي ظَاهِرِ الْيَدِ
٢- وَقَوْفًا بِهَا صَحْبِي عَلَى مَطْبِئِهِمْ يَقُولُونَ لَا تَهْلِكِ أَسَى وَتَحَلَّدِ

1- ハウラの住まいの跡が、未だサフマドの石ころの混じった土地に残ってい

5) *Dīwān De Ṭarafa* 序文, p. 5.

る。それは手の甲の刺青のように輝いている

2- そこで私の友らはラクダを止めて、私に「死ぬほど悲しむな、耐え忍べよ」といった。

この2行目の表現は、イムルウルカイス *إِمْرُؤُ الْقَيْسِ* Imru' al-Qays⁶⁾ のムアッラカの5行目と、一つの単語を除いて同じ表現であり、彼がイムルウルカイスのカシーダ (قصيدة *qaṣida*) と張り合う気概を持って、ムアッラカを詠んだことを推測させる。

タラファはムアッラカのなかで、自ら酒に溺れ、浪費を重ねていたことを次のように詠んでいる。

٥١- وَمَا زَالَ تَشْرَابِي الْخُمُورَ وَلَذَّتِي وَتَبَعِي وَإِنْفَاقِي طَرِيفِي وَمُتَلَدِّي
٥٢- إِلَى أَنْ تَحَامَتِي الْعَشِيرَةُ كُلُّهَا وَأَفْرَدْتُ إِفْرَادَ الْبَعِيرِ الْمَعْبَدِ

51- 私は何時も酒浸りで享楽に身をやつし、稼いだ金も家財も売り払い、浪費三昧に過ごした。

52- 挙句の果て、私の一族は私の元から去り、私はタールを塗られた疥癬病みのラクダ (が隔離されている) ように独りぼっちになった。

やがて彼は放浪生活に疲れて、一族の元に戻り、生活態度を改めることにした。部族の戦士として、バクル族とタグリブ (تَغْلِب Taghlib) 族との間で争われたバスの戦い (حَرْبُ الْبَسُوسِ Harb al-Basūs) に参加して大手柄を立て、多額の戦利品の分配を受けた。手元が豊かになると、再び乱費癖が頭をもたげ、結局、無一文になってしまった。そこで彼は兄のマアバド مَعْبَد Ma'bad に助けを求め、兄はしぶしぶ彼を牧童として働かせることにした。しかし詩才豊かなタラファは、牧童の単純労働には耐えられなかった。

やがてムダル (مُضَرَّ Muḍar) 系の部族が牧草地に入って、タラファの見ている前で、兄から預かっていたラクダを奪い去った。兄に叱られたタラファはヒーラ (الْحِيرَة al-Hīra) のラフム朝 (الْلَّحْمِيَّوْنَ al-Lakhmiyyūn) ムンジル家 (الْمَنَافِرَة al-Manādhira) のアムル王 عَمْرُو بْنُ هِنْد Amr b. Hind に、奪われたラクダを返してもらうよう訴え出ようとして、従兄弟のマーリク مَالِك Mālik に助けを求めた。ところが、マーリクはタラファの頼みをはねつけ、追い返してしまった。彼はムアッラカの68行~77行で、マーリクに失望した心情を詠んでいるが、その心痛のほどは、

٧٨- وَطَلَّمَ دَوَى الْقُرْبَى أَشَدَّ مَضَاضَةً عَلَى الْمَرْءِ مِنْ وَقَعِ الْحَسَامِ الْمُهَنَّدِ

78- 親類縁者の暴虐はインド鉄の名剣の一撃よりも身にこたえる。

と詠んでいる。

次に彼は一族の中で有力な二名の名前を挙げて、彼らにあやかりたいと、

6) 池田修「アルムアッラカート試訳 (I): イムルウルカイス」『関西アラブ・イスラム研究 第3号』(2003年)を参照。

٨٠- فَلَوْ شَاءَ رَبِّي كُنْتُ قَيْسَ بْنَ خَالِدٍ وَلَوْ شَاءَ رَبِّي كُنْتُ عَمْرُو بْنَ مَرْثَدٍ

80- もしわが主の御意志にかなうなら、私はカイス・ブヌ・ハーリドのような人物になろう。あるいは、わが主の御意志にかなうなら、私はアムル・ブヌ・マルサドのような人物になるであろう。

と詠んだ。こうしておだてられたアムル・ブヌ・マルサドは直ちにタラファを招き、庇護することにした。タラファが彼のもとを去るときはラクダ100頭を与えた。タラファはその一部を兄マアバドへの弁償に当て、残りは友人らと浪費して雲散霧消し、三度、貧困の身となった。

2.

タラファはこのような境地から抜け出すために、ヒーラのラフム朝の宮殿に救いを求めることにした。彼の従兄弟の姉の夫 عَبْدُ عَمْرُو بْنِ بَشْرِ ‘Abd ‘Amr b. Bishr なる者は、すでにアムル王の寵臣としての地位を築いていた。また伯父で詩人のアルムタランミスは、アムル王の弟で世継ぎとされた قَابُوسُ Qābūs に仕えていた。タラファは詩人としてすでに名を知られていたらしく、ご機嫌取りの賞賛詩を捧げる詩人を集めていた王家に喜んで迎えられ、アルムタランミスに従い、カーブースに仕えることになった。

カーブースは飲酒と狩猟に溺れていて、勝手気ままに詩人らをこき使ったらしい。誇り高いタラファは、アムル王やカーブースをひそかに風刺することによって、自己満足を覚えるほかなかった。彼がアムル王と弟のカーブースを風刺した詩は次のとおりである⁷⁾。

فَلَيْتَ لَنَا مَكَانَ الْمَلِكِ عَمْرُو رَغَوْنَا حَوْلَ قَبَيْنَا نَحْوُ
مِنَ الزَّامِرَاتِ أَسْبَلَ قَادِمَاهَا وَصَرَّتْهَا مُرْكَنَةً دُرُورُ
يُشَارِكُنَا لَنَا رِجَالَانِ فِيهَا وَتَغْلَوْهَا الْكِبَاشُ فَمَا تَنُورُ
لَعَمْرُكَ إِنَّ قَابُوسَ بْنَ هِنْدٍ لِيَخْلِطَ مُلْكُهُ نُوكَ كَثِيرُ
قَسَمْتُ الدَّهْرَ فِي زَمَنِ رَجِيٍّ كَذَلِكَ الْحُكْمُ يَقْصِدُ أَوْ يَجُورُ

アムル王の代わりに、彼らの天幕の周りで鳴く

乳の張った雌羊が欲しいものよ。

その羊は毛が少なくて、長い両乳房を持ち、

胸元がふくよかで、乳が一杯詰まっている。

雌羊に二頭の仔羊がついていれば、さらに良い。

その雌羊に雄羊が乗っかかっても、逃げたりはしない。

君の生命にかけて誓うが、ヒンドの子カーブースの権力には、

多くの愚鈍が混ざっている。

7) *Dīwān De Ṭarafa*, pp. 96-97.

タラファはこの詩を従兄弟のアブド・アムルに聞かせたが、やがて、アブド・アムルを風刺して次のように詠んだ⁸⁾。

يَا عَجَبًا مِنْ عَبْدٍ عَمِرٍ وَبَغِيهِ لَقَدْ رَامَ ظُلْمِي عَبْدٌ عَمِرٌ فَأَنْعَمَا
وَلَا خَيْرَ فِيهِ غَيْرَ أَنَّ لَهُ غِيَّ أَنَّ لَهُ كَشْحًا إِذَا قَامَ أَهْضَمَا
يَظَلُّ نِسَاءَ الْحَيِّ يَعْكَفُنَ حَوْلَهُ يَقْلَنَ عَسِيبٌ مِنْ سَرَارَةِ مَلْهَمَا
لَهُ شَرِبَتَانِ بِالنَّهَارِ وَأَرْبَعٌ مِنَ اللَّيْلِ حَتَّى آخِضٌ سُخْدًا مُورَمَا
وَيَشْرَبُ حَتَّى يَغْمُرَ الْمَخْضُ قَلْبَهُ وَإِنْ أُعْطِيَ أَتْرَكَ لِقَلْبِي بَحْثَمَا
كَأَنَّ السَّلَاحَ فَوْقَ شُعْبَةٍ بَانَةٍ تَرَى نُفْخًا وَرَدَّ الْأَسْرَةَ أَشْحَمَا

アブド・アムルとその暴虐さには驚きいった。
アブド・アムルは私に非道を働こうとした。
財産を持てること、立ち上がれば腰がか細いこと、
それ以外、彼には何のとりえもない⁹⁾。
部族の女性たちは、彼の周りを踊り歩き、
「マルハム溪谷のすらりと伸びたナツメヤシの樹よ」と叫ぶ。
彼は昼間に二度、夜間に四度酒を飲むために、
彼の腹は体液で膨れ上がってしまった。
それでも彼は、心臓が酒のミルクでびしょ濡れになるまで飲む。
もし私に酒が与えられたなら、心臓には休息を与えるだろう。
彼が着ている甲胃はバーンの小枝にかかっているようなもので、
彼が喘ぐと、深紅の布袋腹が醜悪に波立つ。

ある日のこと、アムル王は彼の大臣を務めるアブド・アムルと風呂に入った。王はアブド・アムルの裸体を見て、タラファが前述の詩で、

「財産を持てること、立ち上がれば腰がか細いこと、それ以外は、彼には何のとりえもない」

と詠んでいる、とからかった。するとアブド・アムルは、
「これしきのこと、あやつが王様について言っていることに比べれば、問題になりません」

と答えて、前述の「王の代わりに雌羊が欲しい」という風刺詩を教えた。王はこれを知って、激怒し、タラファ殺害を決意した、と伝えられている。

アッザウザニー ^{الرَّوْزَنِي} al-Zawzanī (d. 1093) によると、王はここでタラファを成敗すると、彼の属する雄族バクル族の反乱を誘う恐れがあるとして自制した。しかし、タラファは王に殺害される次の事件をおこした。

タラファはある日、王が酒を飲む相手役を務めていた。それを上のほうから王の妹が見下していた。彼女の姿がタラファが手にする盃に写ったのを見て、彼は次の

8) *Diwān De Tarafa*, p. 94.

9) 1行目と2行目、伴康哉訳。

ように詠んだ¹⁰⁾。

أَلَا بَاءَ بِي الظَّيِّ الذِي يَبْرُقُ شَنْفَاهُ
وَلَوْلَا الْمَلِكُ الْقَاعِدُ قَدْ أَلْتَمَنِي فَوَاهُ

耳飾りのきらめくカモシカは、私のもとに帰ってきた。

王さえこの場にいなかったなら、その唇をわたしに押しつけるだろう¹¹⁾。

彼女はタラファのみならず、アルムタランミスとも人目を忍ぶ仲になっていたとも伝えられている。そこでアムル王はタラファとアルムタランミス両名を殺害する計画を進めることになる。

3.

おそらく564年頃のある日のこと、アムル王はタラファとその伯父のアルムタランミスを召し出して、アラビア半島南東部に住んでいる彼らの家族を訪問するために賜暇を与えると告げた。加えて道中の旅がとどこおりなく続けられるよう、アルバハレーンの長官宛の書状を託し、

「この書状を 'Abū Karib に渡せ。あのものがそちらを歓待し、よく尽すよう命じておいた」

と言った。

二人の詩人はアルバハレーンの長官の恩賞に与えるものと期待して旅立った。ところがいくばくも進まないところで、年老いたアルムタランミスが疑念にかられて、タラファに、

「お前は若くて経験不足だが、どうも王が裏切ろうとしていると思われる。かつてわしらは王を中傷する詩を詠んだことがあった。王がとんでもない災いをわしらに及ぼそうと、この手紙の中にしたためてあるのではと心配だ。ひとつ手紙を開いて中身を見ることにしよう。もし良いことが書いてあれば、届け先まで持参すればよい。だがひどい目に会うと書かれていれば、川に捨ててしまえばよい」

と話しかけた。しかしタラファは王の書状の封印を破ることは出来ないと言って、断った。彼らがアルヒーラの川の流れに沿って進んでいくと、一人の賢そうな少年に出会った。アルムタランミスが、

「これ童よ、そなた字が読めるか」

と尋ねると、少年は読めると答えた。少年はアルムタランミスから書状を受け取って、読んで聞かせたが、そこにはこのように書かれていた。

「余のこの書状をアルムタランミスから受け取ったなら、ただちに彼の両手両足を切り、生き埋めにせよ」

アルムタランミスは手紙を川に捨てて、タラファに、

10) *Diwān De Ṭarafa* 序文, p. 13.

11) 伴康哉訳。

「タラファよ、お前の手紙にも同じことが書かれているに違いない」

と忠告したが、タラファは王に対して頑固なまでに忠実で、そのまま旅を続けた。思慮にたけたアルムタランミスは、シリアの方へ逃げ、若いタラファはアルバハレーンに着いて惨殺された。

アルアンバーリー الأَنْبَارِيُّ al-Anbārī (885-940) によると、アルムタランミスが王の手紙に疑念を抱いたのは、道中に出会った老人とのやりとりであったとしている。

إِذَا أَنَا يَشِيخٌ عَنْ يَسَارٍ يَنْتَرِزُ وَمَعَهُ كِشْرَةٌ يَأْكُلُهَا وَيَقْصَعُ الْقَمَلَ فَقُلْتُ:
بِاللَّهِ إِنْ رَأَيْتُ شَيْخًا أَهْمَقَ وَأَضْعَفَ وَأَقْلَلَ عَقْلًا مِنْكَ. قَالَ: وَمَا تَنْكَرُ؟ قُلْتُ:
تَنْتَرِزُ وَتَأْكُلُ وَتَقْصَعُ الْقَمَلَ؟ قَالَ: أَخْرَجَ خَبِيثًا فَأَدْخَلَ طَبِيبًا وَأَقْتَلَ عَبْدًا وَأَهْمَقَ
مَنْ فِي الدُّنْيَا حَامِلٌ حَقِيقَةً يَمِينُهُ لَا يَدْرِي مَا فِيهِ فَتَبَهَّنِي فَكَأَنِّي كُنْتُ نَائِمًا.

すると突然、左側に用を足しながらシラミを潰し、パン屑を食べている老人に出会った。私が、

「お前さんほど愚かで、頭が弱く、脳味噌の足りない年寄りに出会ったことはないぞ」

と言うと、その老人は、

「何が気に入らぬか」

と問い返した。私が、

「物を食らい、シラミを潰しながら、用を足しているからだ」

と言うと、老人は、

「わしは悪いものを出して、良いものを入れ、敵を殺しているのだ。右手に中身に何が書かれているかを知らずして、己が死をさげている者の方がよっぽど馬鹿というものだ」

と言った。まるで眠っていたような私に、彼は気づかせてくれた。

アルバハレーンの長官はタラファの血縁につながる者で、タラファに直接手出しするのを好まず、アムル王に処刑係を派遣するように求めた。そこでアムル王はタブリブ族のある男を送った。その男がタラファに、

「お前の処刑は避けられない。どんな死に方をしたいか自分で決めよ」

と告げた。タラファは、

「やむを得ないとなれば、酒を注いでくれ。その間に血管を切れ」

と応じた。こうして、彼は酒を飲みながら出血が続き、死んだとのことである。彼の姉アルヒルニク الْخِرْنِيقُ al-Khirniq が、タラファの死を悼んで詠んだという詩句が次のように伝えている¹²⁾。

عَدَدْنَا لَهُ سِتًّا وَعِشْرِينَ حِجَّةً فَلَمَّا تَوَفَّاهَا اسْتَوَى سَيِّدًا ضَخْمًا

われらは彼のよわい二十六を数えた。これをまっとうしたとき、
彼は大いなる頭 (かしら) に等しい者であった¹³⁾。

12) Ḥannā al-Fākhūrī, *Tārīkh al-ʿAdab al-ʿArabī*, Beirut, p. 100.

13) 伴康哉訳。

タラファは若くして殺されたため、「20歳の子 *ابن العِشْرِينَ* *ibn al-‘ishrin*」と呼ばれているが、おそらく569年頃、30歳に達しない若さで人生を閉じたのだろう。

訳出したタラファのムアッラカは、次の3部分からなる。

- 1) 1行~10行：かつて恋人ハウラが住んでいた住まいの跡を訪れて、思い出に泣く。
- 2) 11行~44行：主として雌ラクダの描写に当てている。
- 3) 45行~：詩人自身の生きざま、人生への考え方、従兄弟に対する非難、自身の行いの正当性を図る訴え。

以上をまとめるのに次の資料を主として参考にした。

1. Max Seligsohn, *Dīwān De Tarafa*, 1901, Paris
2. *التِّبْرِيزِيّ* al-Tibrīzī (1030–1108), al-Zawzanī, al-Anbārī 等のムアッラカ
ート注釈書
3. A. J. Arberry, *The Seven Odes*, 1957, London
4. 伴康哉「悲劇の宮廷詩人タラファ」『オリエント』vol. xiv, No. 2

特に4.の訳文はそのまま利用したところが多い。

مَعْلَقَةٌ طَرْفَةَ بْنِ الْعَبْدِ

- | | |
|--|---|
| ١- لِحَوْلَةٍ أَطْلَالَ بِرُوقَةٍ تَهْمِدُ | ١- تَلُوحُ كَبَاقِي الْوَشْمِ فِي ظَاهِرِ الْيَدِ |
| ٢- وَفَوْقَهَا صَحْبِي عَلَى مَطِيئِهِمْ | ٢- يَقُولُونَ لَا تَهْلِكِ أَسَى وَيَحْلَدُ |
| ٣- كَأَنَّ حُدُوجَ الْمَالِكِيَّةِ غُدُوَّةٌ | ٣- خَلَايَا سَفِينٍ بِالتَّوَاصِفِ مِنْ دَدِ |
| ٤- عَدُولِيَّةٌ أَوْ مِنْ سَفِينِ آبْنِ يَامِنٍ | ٤- يَجُورُ بِهَا الْمَلَاخُ طَوْرًا وَيَهْتَدِي |
| ٥- يَشْقُ حَبَابُ الْمَاءِ حَيْرُومَهَا بِهَا | ٥- كَمَا قَسَمَ التُّرْبُ الْمُفَايِلُ بِالْيَدِ |
| ٦- وَفِي الْحَيِّ أَحْوَى يَنْقُضُ الْمَرْدَ شَادِنٌ | ٦- مُظَاهِرٌ سَمَطَى لَوْلُو وَرَبْرَجِدِ |
| ٧- تَحْدُولُ تُرَاعَى رَبْرَبًا بِحَمِيلَةٍ | ٧- تَنْأَوُلُ أَطْرَافَ الرِّيرِ وَتَرْتَدِي |
| ٨- وَتَبْسُمُ عَنْ أَلْمَى كَأَنَّ مَنْوَرًا | ٨- تَحْلُلُ حَرَّ الرَّمْلِ دِعْصَ لَهُ نَدَى |
| ٩- سَقَنَهُ إِيَاهُ الشَّمْسُ إِلَّا لِثَاتِهِ | ٩- أَسِفَتْ وَلَمْ تَكْدِمِ عَلَيْهِ بِإِثْمِدِ |
| ١٠- وَوَجْهَهُ كَأَنَّ الشَّمْسَ حَلَّتْ رِدَاءَهَا | ١٠- عَلَيْهِ نَقِيُّ اللَّوْنِ لَمْ يَتَخَدَّدِ |
| ١١- وَإِنِّي لَأُمْضِي الِهْمَّ عِنْدَ احْتِضَارِهِ | ١١- يَعْجَوَاءُ مِرْقَالٍ تَرْوُحُ وَتَعْتَدِي |
| ١٢- أَمُونٌ كَأَلْوَاكِحِ الْإِرَانِ نَسَائُهَا | ١٢- عَلَى لَاحِبٍ كَأَنَّهُ ظَهْرُ بُرْجِدِ |

وْظِيْفًا وَظِيْفًا فَوْقَ مَوْرٍ مُعَبَّدٍ
 حَدَائِقَ مَوْلَى الْأَسْرَةِ أَغْيَدٍ
 يَذِي خُصْلٍ رَوَعَاتٍ أَكْلَفَ مُلَبَّدٍ
 حِقَاقِيهِ شُكَا فِي الْعَسِيْبِ مِمْسَرَّدٍ
 عَلَى حَشِيْفٍ كَالشَّنِّ ذَاوٍ مَجْدَدٍ
 كَأَنَّهُمَا بَابَا مُزِيْفٍ مُمَرَّدٍ
 وَأَجْرِنَهُ نُزْرَتْ بِدَأَى مُنْصَدٍ
 وَأَطْرَقِيسَى تَحْتَ صُلْبٍ مُؤَيَّدٍ
 تَمُرُّ بِسَلْمَى دَالِجٍ مُتَشَدَّدٍ
 لُكْتَئِنَقَا حَتَّى تُشَادَ بِقَرْمَدٍ
 بَعِيدَةً وَخِدَ الرَّجُلِ مَوَارَةَ الْيَدِ
 لَهَا عَضْدَاهَا فِي سَقِيْفٍ مُسْتَدٍ
 لَهَا كَيْفَاهَا فِي مُعَالٍ مُصْعَدٍ
 مَوَارِدُ مِنْ خَلْقَاءَ فِي ظَهْرٍ قَرْدَدٍ
 بَنَائِقُ غُرٍّ فِي قَمِيصٍ مُقَدَّدٍ
 كُسْكَانٍ بُوصَى بِدِجْلَةٍ مُصْعَدٍ
 وَعَى الْمُتَلَقَى مِنْهَا إِلَى حَرْفٍ مِزْدٍ
 كَسِبَتْ الْيَمَانِي قَلْدُهُ لَمْ يُحَرَّدٍ
 يَكْهَفْنِي حِجَاجِي صَخْرَةٍ قَلْتُ مَوْرِدٍ
 كَمَكْحُولَتِي مَذْعُورَةٍ أُمَّ فَرْقَدٍ
 لَهْجَسٍ خَفِيٍّ أَوْ لَصُوتٍ مُنَدَّدٍ
 كَسَامِعَتِي شَاةٍ بِحَوْمَلٍ مُفَرَّدٍ
 كِمِرْدَاةٍ صَخْرَةٍ فِي صَفِيحٍ مُصْمَدٍ
 وَعَامَتٍ بَضْبُعِيْهَا بَجَاءِ الْخَفِيْدِ
 مَخَافَةٍ مَلُوءٍ مِنَ الْقَدِّ مُخْصَدٍ
 عَنِيْقٌ مَتَى نَرْجُمُ بِهِ الْأَرْضَ تَزْدَدِ
 أَلَا لَيْتَنِي أَفْدِيْكَ مِنْهَا وَأَفْتَدِي
 مُصَابَا وَلَوْ أَمْسَى عَلَى غَيْرِ مَرَصِدٍ
 عُنِيْتُ فَلَمْ أَكْسَلْ وَلَمْ أَتَبَلَّدِ
 وَقَدْ خَبَّ آلُ الْأَمْعَزِ الْمَتَوَقِّدِ
 تُرَى رَبَّهَا أَذْيَالٍ سَحْلٍ مَمْدَدٍ
 وَلَكِنْ مَتَى يَسْتَرْفِدِ الْقَوْمُ أَرْفَدِ
 وَإِنْ تَفْتَنِيْضِي فِي الْحَوَانِيْتِ تَصْطَدِ

١٣- تُبَارِي عِتَاقًا نَاجِيَاتٍ وَأَنْبَعَتْ
 ١٤- تَرَبَّعَتِ الْفُقَّيْنِ بِالشُّؤْلِ تَرْتَعِي
 ١٥- تَرِيْعٌ إِلَى صَوْتِ الْمُهَيْبِ وَتَتَّقِي
 ١٦- كَأَنَّ جَنَاحِي مَضْرَحِي تَكْتَفَا
 ١٧- فَطُورًا بِهِ خَلْفَ الزَّمِيلِ وَتَارَةً
 ١٨- لَهَا فَخِذَانِ أَكْمِلَ التَّحْضِ فِيهِمَا
 ١٩- وَطَيَّ مَحَالٍ كَالْحَيِّ تَحْلُوفُهُ
 ٢٠- كَأَنَّ كِنَاسِي ضَالَةً يَكْتَفَانِهَا
 ٢١- لَهَا مِرْفَقَانِ أَفْتَلَانِ كَأَنَّمَا
 ٢٢- كَقَنْطَرَةِ الرَّوْمِيِّ أَقْسَمَ رَبُّهَا
 ٢٣- صُهَابِيَّةُ الْعُنْتُونِ مُوْجِدَةُ الْقَرَا
 ٢٤- أَمِرْتُ يَدَاهَا فَنُلَّ شَزْرٍ وَأُجْنِحْتُ
 ٢٥- جَنُوحٌ دَفَاقٌ عِنْدَلٍ ثُمَّ أَفْرِعْتُ
 ٢٦- كَأَنَّ غُلُوبَ التَّسْعِ فِي دَايَاتِهَا
 ٢٧- تَلَاقَى وَأَحْيَانًا تَبِيْنُ كَأَنَّهُمَا
 ٢٨- وَأَتْلُعُ نَهَاسٌ إِذَا صَعَّدَتْ بِهِ
 ٢٩- وَجُجْمَةٌ مِثْلُ الْعِلَالَةِ كَأَنَّمَا
 ٣٠- وَوَجْهٌ كَقِرْطَاسِ الشَّامِيِّ وَمِشْفَرٍ
 ٣١- وَعَيْنَانِ كَالْمَاوِيَّتَيْنِ اسْتَكْنَتَا
 ٣٢- طُخُورَانِ عُوَّارِ الْقَدَى فَتَرَاهُمَا
 ٣٣- وَصَادِقَتَا سَمْعِ التَّوَجُّسِ لِلشَّرَى
 ٣٤- مُؤَلَّلَتَانِ تَعْرِفُ الْعِنَقَ فِيهِمَا
 ٣٥- وَأَزْوَعٌ نَبَاسٌ أَحَدُ مُلْمَلَمٍ
 ٣٦- وَإِنْ شِئْتُ سَامَى وَاسِطَ الْكُورِ رَأْسُهَا
 ٣٧- وَإِنْ شِئْتُ لَمْ تُرْقِلْ وَإِنْ شِئْتُ أَزْقِلْتُ
 ٣٨- وَأَعْلَمُ مَخْرُوتٍ مِنَ الْأَنْفِ مَارَنٍ
 ٣٩- عَلَى مِثْلِهَا أَمْضَى إِذَا قَالَ صَاحِي
 ٤٠- وَجَاسَتْ إِلَيْهِ النَّفْسُ خَوْفًا وَخَالَهُ
 ٤١- إِذَا الْقَوْمُ قَالُوا مَنْ قَتَى خِلْتُ أَنِّي
 ٤٢- أَحَلْتُ عَلَيْهَا بِالْقَطِيعِ فَأَخْدَمْتُ
 ٤٣- فَذَالَتْ كَمَا ذَالَتْ وَلِيْدُهُ بِمَجْلِسٍ
 ٤٤- وَلَسْتُ بِجَلَالِ الثَّلَاحِ تَخَافَةُ
 ٤٥- وَإِنْ تَبَغْنِي فِي حَلْقَةِ الْقَوْمِ تَلْقَنِي

وإن كنت عنها غانياً فاعنّ وازدد
إلى ذروة البيت الكريم المصمّد
تروح إلينا بين بردٍ وبحسّد
يجسّ الندامى بضّة المتجرّد
على رسلها مطروقة لم تشدد
وتبعي وإنفاقي طريفي ومثليدي
وأفردت إفراد البعير المعبد
ولا أهلّ لذلك الطراف الممدّد
وأن أخضر اللذات هل أنت تخليدي
قدغني أبادرها بما ملكك يدي
وحذك لم أخفل متى قام عودي
كمنيت متى ما فعل بالماء تزيد
كسيد الغصا نبهته المتورد
ببهكنة تحت الخباء المعمد
على عشرٍ أو خروع لم يخصد
تحافة شرب في الحياة مصرد
سنعلم إن منّا عداً أيّنا الصدي
كفر عوي في البطالة مفسد
صفائح ضم من صفيح منصد
عقيلة مال الفاحش المتشدّد
وما تنقص الأيام والدهر ينقد
لكالطول المرحى ونيابه في اليد
متى أذن منه ينأ عني ويبعد
كما لأمني في الحى قرط بن أعبد
كأنا وضعناه إلى رمس ملحد
نشدت فلم أغفل حمولة معبد
متى يك أمرٌ للنكيهة أشهد
وإن ياتيك الأعداء بالجهد أجهد
يشرب حياض الموت قبل التنجد
هجائي وقذفي بالشكاة ومطردي
لقرج كربى أو لأنظرني غدي
على الشكر والتسأل أو أنا مفتد
على المرء من وقع الحسام المهند

٤٦- متى تأنى أصبحك كأساً رويّة
٤٧- وإن يلتق الحى الجميع تلاقى
٤٨- ندامى ييض كالنجوم وقينة
٤٩- رحيب قطاب الحيب منها رفيقة
٥٠- إذا نحن قلنا أسمعيننا انبرت لنا
٥١- وما زال تشرابي الخمر ولدتي
٥٢- إلى أن تحامتن العشيرة كلها
٥٣- رأيت بني غبراء لا ينكروني
٥٤- ألا أيّ هذا اللائمي أشهد الوعى
٥٥- فإن كنت لا تسطيع دفع منيتي
٥٦- فلو لا ثلاث هن من عيشة الفقى
٥٧- فمنهن سبق العاذلات بشربة
٥٨- وكري إذا نادى المضاف محبباً
٥٩- وتقصير يوم الدخن والدخن معجب
٦٠- كأنّ اليرين والدماليج علقت
٦١- ذريتي أروى هامتي في حياتها
٦٢- كريم يروى نفسه في حياته
٦٣- أرى قبر نحام بخيل بماله
٦٤- ترى جنوتين من تراب عليهما
٦٥- أرى الموت يعتام الكرام ويضطفي
٦٦- أرى العيش كنزاً ناقصاً كل ليلة
٦٧- لعمرك إن الموت ما أخطأ الفقى
٦٨- فما لي أراي وابن عمي مالىكا
٦٩- يلوّم وما أدرى علام يلوّمني
٧٠- وأياسني من كل خير طلبته
٧١- على غير ذنب قلته غير أنني
٧٢- وفرت بالقربى وجذك إنه
٧٣- وإن أذع في الجلى أكن من حماتها
٧٤- وإن يقدفوا بالقدع عرضك أسقيهم
٧٥- بلا حدّ أحدثته كمحدث
٧٦- فلو كان مولاى أمراً هو غيره
٧٧- ولكن مولاى أمرؤ هو خانقي
٧٨- وظلم ذوى القربى أشدّ مضاضة

وَلَوْ حَلَّ بَيْنِي نَائِيًا عِنْدَ صَرْعِدٍ
 وَلَوْ شَاءَ رَبِّي كُنْتُ عَمْرَو بْنَ مَرْثِدٍ
 بَنُونَ كِرَامٍ سَادَةً لِمُسَوَّدٍ
 خَشَّاشِ كِرَاسِ الْحَيَّةِ الْمُتَوَقِّدِ
 لِأَبْيَضِ عَضْبِ الشَّفَرَتَيْنِ مُهَنَّدِ
 كَفَى الْعَوْدَ مِنْهُ الْبَدَأَ لَيْسَ بِمِعْضِدِ
 إِذَا قِيلَ مَهْلًا قَالَ حَاجِزُهُ قَدْ
 مَنِعًا إِذَا بَلَّتْ بِقَائِمِهِ يَدِي
 نَوَادِيَهُ أَمْشِي بِعَضْبٍ مُجَرَّدِ
 عَقِيلَةَ شَيْخٍ كَالْوَبِيلِ يَلْنَدِدِ
 أَلَسْتُ تَرَى أَنَّ قَدْ أَتَيْتَ بِمُؤَيِّدِ
 شَدِيدٍ عَلَيْنَا بَغِيَهُ مُتَعَمِّدِ
 وَإِلَّا تَرُدُّوْا قَاصِيَ الْبَرْكِ يَزْدِدِ
 وَيُسْعَى عَلَيْنَا بِالْسَدِيدِ الْمُسْرَهْدِ
 وَشَقَى عَلَى الْجَنَبِ يَا ابْنَةَ مَعْبِدِ
 كَهَمِّي وَلَا يُغْنِي عَنَائِي وَمَشْهَدِي
 ذَلُولٍ بِأَجْمَاعِ الرَّجَالِ مُلْهَدِ
 عَدَاوَةُ ذِي الْأَصْحَابِ وَالْمُتَوَحِّدِ
 عَلَيْنَهُمْ وَإِقْدَامِي وَصِدْقِي وَتَحْتَدِي
 نَهَارِي وَلَا لَيْلِي عَلَى بِسْرَمِدِ
 حِقَاطًا عَلَى عَوْرَاتِهِ وَالتَّهَدُّدِ
 مَتَى تَعَزَّكَ فِيهِ الْقَرَائِصُ تُرْعَدِ
 عَلَى النَّارِ وَأَسْتَوْدَعْنَهُ كَفَّ مُحَمَّدِ
 يَأْتِيكَ بِالْأَخْبَارِ مَنْ لَمْ تَزُودِ
 بَنَانًا وَلَمْ تَضْرِبْ لَهُ وَقْتُ مَوْعِدِ

٧٩- فَذَرْنِي وَخُلُقِي إِنِّي لَكَ شَاكِرٌ
 ٨٠- فَلَوْ شَاءَ رَبِّي كُنْتُ قَيْسَ بْنَ خَالِدٍ
 ٨١- فَأَضْبَحْتُ ذَا مَالٍ كَثِيرٍ وَعَادَنِي
 ٨٢- أَنَا الرَّجُلُ الْجَعْدُ الَّذِي تَعْرِفُونَهُ
 ٨٣- فَالَيْتُ لَا يَنْفُكُ كَشْحِي بِطَانَةٍ
 ٨٤- حُسَامٍ إِذَا مَا قُمْتُ مُنْتَصِرًا بِهِ
 ٨٥- أَحْيَى ثِقَةٍ لَا يَنْتَنِي عَنْ ضَرْبَةٍ
 ٨٦- إِذَا ابْتَدَرَ الْقَوْمُ السَّلَاحَ وَجَدْتَنِي
 ٨٧- وَبَرِّكَ هُجُودٍ قَدْ أَثَارَتْ مَخَافَتِي
 ٨٨- فَمَرَّتْ كَهَاءُ ذَاتِ خَيْفٍ جَلَالَةٍ
 ٨٩- يَقُولُ وَقَدْ تَرَ الْوُظَيْفَ وَسَافَهَا
 ٩٠- وَقَالَ أَلَا مَاذَا تَرُونَ بِشَارِبِ
 ٩١- وَقَالَ دَرُوهُ إِنَّمَا نَفَعَهَا لَهُ
 ٩٢- فَظَلَّ الْإِمَاءُ يَمْتَلِلْنَ حُورَاهَا
 ٩٣- فَإِنْ مِتُّ فَأَنْعِيْنِي بِمَا أَنَا أَهْلُهُ
 ٩٤- وَلَا تَجْعَلِيْنِي كَأَمْرِي لَيْسَ هَهُنَا
 ٩٥- بِطِيٍّ عَنْ الْجُلَى سَرِيعٍ إِلَى الْخَتَا
 ٩٦- وَلَوْ كُنْتُ وَغَلًا فِي الرِّجَالِ لَضَرَبَنِي
 ٩٧- وَلَكِنْ نَفَى عَنِّي الْأَعَادِي جُرَأَتِي
 ٩٨- لَعَمْرُكَ مَا أَمْرِي عَلَى بَغْمَةٍ
 ٩٩- وَيَوْمٍ حَبَسْتُ النَّفْسَ عِنْدَ عِرَاكِهِ
 ١٠٠- عَلَى مَوْطِنٍ يَخْشَى الْفَقَى عِنْدَهُ الرَّدَى
 ١٠١- وَأَصْفَرَ مَضْبُوحٍ نَظَرَتْ حَوَارَهُ
 ١٠٢- سَتَيْدِي لَكَ الْأَيَّامُ مَا كُنْتُ جَاهِلًا
 ١٠٣- سَيَاتِيكَ بِالْأَخْبَارِ مَنْ لَمْ تَبِعْ لَهُ

1- ハウラの住まいの跡が、未だサフマドの石ころの混じった土地に残っている。それは手の甲の刺青のように輝いている¹⁴⁾。

2- そこで私の友らはラクダを止めて、「死ぬほど悲しむな、耐え忍べ」と言った¹⁵⁾。

3- (別れの) 朝、(ラクダの背に) マーリク族の女性を乗せたハウダジの列は、ダド溪

14) アルアンバーリー (以下 A) は下の句を、「إِلَى الْعَدَا وَأَنْبَكِي وَأَنْبَكِي بِهَا ظَلَيْتُ بِهَا أَنْبَكِي وَأَنْبَكِي إِلَى الْعَدَا」私はそこで夜が明け
 るまで泣き続けた」としている

15) アッザウザニー (以下 Z) は行末の単語「وَجَعَلْتُ 耐え忍べ」が違うだけで、イムルウルカイス
 のムアッラカの5行目と同じと指摘している。

谷の広い沢を進む大型の船団のようだ。

- 4- 船はアダウラの島で作ったものか、あるいはイブン・ヤーミンの手によるものであろう。船頭は時に斜めに、時にまっすぐにこれを操って進んでいく。
- 5- 船はその舳先で泡立つ波を割るが、それはあたかも子供が盛砂を手で割るようだ。
- 6- 部族の中には、瞳が黒く唇が褐色で、アラークの実を首を伸ばして振り落とそうとしているガゼル (のような恋人が) いる。彼女は真珠と貴カンラン石の二本の首飾りを重ねている¹⁶⁾。
- 7- 緑色の茂みの中で草をはむ群れから離れて、アラークの枝先に首を伸ばして、その枝で体を覆うガゼル。
- 8- 彼女が笑うと褐色の唇が開かれ、露で湿った小山に咲く雛菊のような歯が、清らかな砂地のなかで輝いている¹⁷⁾。
- 9- 太陽の光が前歯に当たって、ひとときわ白く映えさせるが、歯茎は例外で、コホルが塗られ、彼女がそれを損ねるように食べ物にかぶりつくことはない¹⁸⁾。
- 10- 彼女の顔には日輪が美しい衣を着せたようで、容色は清純で小じわは少しもない。
- 11- 私は悲しみに襲われると、朝夕、体の引き締まった俊足の雌ラクダに乗って、これを振り払う。
- 12- 足元は確かで、棺の板のような (広い背をした) このラクダを、縞模様の布の表のようにはっきりした道を、鞭を当てて駆けさせる。
- 13- このラクダは由緒ある血筋の俊足の雌ラクダと競い、踏み固められた道を、脛と脛が接するばかりにしてひた走る¹⁹⁾。
- 14- 春になると、このラクダは乳の枯れたラクダに混ざって、丘の上の雨に恵まれた緑豊かな地の草を食べる。
- 15- 叫び人の叫び声を聞くとラクダは戻ってきて、ふさふさとした尾で、暗赤色の毛深い雄ラクダに怯えてわが身を守る。
- 16- まるで白いハゲワシの両翼がラクダの尻の左右を抱いて、錐で尾骨に差し込まれているようだ。
- 17- 時には、その尾で背後の乗り手を打ち、時には、古ぼけた水袋のように潤れしぼんだ己が乳房を打つ。
- 18- ラクダの両腿の筋肉は見事に引き締まり、聳え立つ滑らかな城壁の門 (柱) を思わせる。
- 19- 背骨には弓のような肋骨がしっかりと組み合わされて、首の付け根は整然と脊椎骨に固く突き刺さっている。
- 20- まるでハマナツメの根元にうがたれた二つの洞穴がラクダを囲んで、弓が逞しい肋骨の下で曲げられているようだ。
- 21- 両肘は広く張っていて、頑強な水運び人が二つの皮バケツを持ち運ぶ姿に似ている²⁰⁾。
- 22- それはまたローマ人の石橋のようで、建て主はそれが高く聳え、焼きレンガで包み

16) ガゼルのように首が長くて美しく、牛のように瞳が黒い女性がいるの意味。

17) 唇と歯の美しさを描いている。

18) アラブの女性は唇や歯茎にコホルを塗って歯の白さをきわだたせる。

19) Zは12行と13行の間に「كَانَتْهَا/سَفْتَجَةً تَبْرِي لِأَزْعَرِ أَرْبِدِ」雄ラクダのように筋肉質で、ひずめで土をけるさまはダチョウのようで、毛が少なく灰色である」の一行を入れている。

20) 水運び人の両肘の張り具合をラクダの四肢のそれと比べている。

- 込まれるようにと誓ったものだ²¹⁾。
- 23- 顎鬚は赤みを帯び、背は頑強で、俊足の走幅は広く、足取りも軽快である。
- 24- 前足は下がらない上げられた綱のようで、その両腕部は強固な胸天井にななめに突き刺さっている。
- 25- 激しく横揺れしながらも素早く走る。頭は大きく、高く吊り上げられた上体の上に両肩が聳えている。
- 26- 胸元を擦り剥く帯の傷跡は、堅い荒野の上の滑らかな岩にうがたれて、水路となっている溝のようである。
- 27- 帯跡はある箇所では出会い、ある箇所では別れているが、あたかも切り裂かれたシャツの襷 (まち) のようである。
- 28- 長い首を持ち上げて高く伸ばした姿は、チグリス川を渡る帆船の船尾のようだ。
- 29- 頭蓋骨は金床のように固く、その左右の接合部はヤスリの刃のように鋭利で固い。
- 30- 頬はシリア人の羊皮紙のように白く滑らかで、鼻はヤマン人がナイルアカシヤで染めた牛革のように柔らかで、曲がっていない。
- 31- 両目はそれぞれ鏡のようで、眼窩の中に匿われ、清水を貯える岩穴のようだ。
- 32- 目やにやほこりをよく排出する両目を見ると、子連れのために怯えている雌の野牛の黒く縁取られた目と思うだろう。
- 33- 両耳は確かなもので、夜旅であってもかすかな囁き声も、高い叫び声も良く聞き分ける。
- 34- 槍のように鋭くとがった両耳は由緒ある血統を示し、ハウマルの荒野でひとり草を食む野牛の耳のように、(油断なく) 立っている。
- 35- 震える心臓は激しく波打つが、固い石板を打ち砕く碎石機のように堅固である。
- 36- 求めに応じてラクダは頭を鞍の前輪の高さに保ち、前足で雄ダチョウのような速さで泳ぐように走る²²⁾。
- 37- また、望みどおりにゆっくり歩いたり、早駆けしたりするが、それは強く撚り合わされた皮製の鞭を恐れてのことである。
- 38- 上唇は裂けており、鼻には穴が開けられ、弾力があり、血統に優れ、鼻で地面を払うと一層速度を増す。
- 39- 私はこのようなラクダに乗って荒野を旅する。すると友は、「出来ることなら君の身代わりになり、私も救われたいものよ」と言う。
- 40- 私の心は恐怖で沸き立ち、たとえ道中に敵の待ち伏せがなくとも、災難にあつて命を落とすのではないかと案じているのだ。
- 41- 人々が「誰が勇者か」と問えば、それはすなわち私のことだと思っている。私は怠惰、愚鈍な人間ではない。
- 42- 私がラクダに鞭を加えると、ラクダは速度を上げるが、燃えるような石ころ交じりの地面から塵気楼がゆらゆらと立ち上がっていた。
- 43- ラクダが優雅に歩むさまは、奴隸娘が宴で主人に、床を引きずるゆっくりとした白衣の裾をみせながら、踊り出る姿のようである。
- 44- 私は (客や敵が来るのを) 恐れて、山の上にわが身を隠すような男ではない。人々が助けを求めれば直ちに助ける。
- 45- あなたが私を人々がたむろするところで探せば、私を見出すであろう。またもし、

21) ラクダの整然とした骨格や四肢の組み合わせを石橋にたとえている。

22) Z は36行目に38行を入れているが、A に従った。

酒屋で捕らえようと思えば、そこで私を捉えるであろう。

- 46- いつなりと訪ねてくれば、朝酒を杯に満たしてさしあげよう。もし酒が欲しくなければ、なしで済ませ、欲しいものをさらに求めよ²³⁾。
- 47- 部族が全て集まるときには、あなたは私が人々が頼りにして訪ねる高貴な一門の首座ににいるのに気づくだろう。
- 48- 私の飲み仲間が綺羅星のように輝く汚れない人々で、歌姫は縞模様のガウンかサフランで染めた衣をまといて現れる。
- 49- 歌姫の襟元は広く開いており、酒友らが（手を入れて触ると、肌触りは）柔らかで、衣をはがされた肉体は純白である。
- 50- 我々が「歌を聞かせてくれ」と求めると、これに答えて彼女は歌ったが、目は物憂げで、力が抜けていた²⁴⁾。
- 51- 私は何時も酒浸りで享楽に身をやつし、稼いだ金も家財も売り払い、浪費三昧に過ごした。
- 52- 挙句の果て、私の一族は私の元から去り、私はタールを塗られた疥癬病みのラクダ（が隔離されている）ように独りぼっちになった。
- 53- けれども私は塵の子（貧乏人）たちは私を厭わないことを知った。また広いテントに住む裕福な者たちも同様であった²⁵⁾。
- 54- さて、私が戦争に加わったとか、享楽にわが身をやつしたと言って私を誹る者よ、貴殿は（私がこれをやめれば）永遠の命を私に授けてくれるのか。
- 55- 貴殿が私の死を防ぐことが出来ないのであれば、私が資材を尽くして死に急ぐのを捨ておかれよ。
- 56- 男子たるべき者が生きていくうえで三つの楽しみがなければ、運勢に誓って言うが、私の死を悼む者が何時訪ねてこようとも気にしない。
- 57- その第一は、咎める女性の機先を制して、水を注ぐと泡立つ真紅のブドウ酒を一気に飲むことである。
- 58- 第二は、不安に怯える者の叫びに応じて、足が弓なりに反った馬をかえすこと。それは水場に向かうところを、貴殿に驚かされて疾駆する狼のように早く走る。
- 59- 第三は、雨天の日を短しとばかりに、いな雨天の日とは素晴らしいもの、一柱で持ち上げたテントの下で、ふくよかな美しい乙女と戯れること。
- 60- 彼女の足首飾りと腕輪は、まるで曲げられていないゴムの樹かヒマの小枝にはめられているようだ。
- 61- 私の頭が生きているうちに、私に酒をあびさせてくれ。生きている間に、わずかな酒しか飲めないのかと恐れる²⁶⁾。
- 62- 私は気前の良い男だ。生きている間自らに痛飲させる。明日もしわれらが死ねば、（飲みすぎると私を咎めた）貴殿と私とどちらが渴きをおぼえるだろう。
- 63- 思うに欲深で金を惜しむものの墓は無為に金を費やし道を迷ったものの墓のようだ。

23) Zには46行目が欠けている。

24) Zは50行に次に「إِذَا رَجَعَتْ فِي صَوْنِهَا حَلَّتْ صَوْنُهَا / أَنْظَارُ عَلَى رُجْعِ رَدٍ」彼女が繰り返し歌うと、あなたはその声が生まれた仔の死を恐れて、雌ラクダが泣きあう声だと思うだろう」の一行を入れている。

25) 近親者は去り、他人が近づいてきたことを述べている。

26) 61行はZには欠けている。

- 64- 貴殿は (けちんぼと気前のよい者の) 二つの盛り土 (墓) を見るだろう。そのどちらにも平たくて固い石板が積み上げられている。
- 65- 私の見るところ、死神は気前の良いものを選び、けちんぼの不徳漢からは最善の宝を奪うようだ。
- 66- 私の見るところ、人生とは毎夜減りゆく宝であり、歳月、時世が減らすものはいずれ消滅する。
- 67- 貴殿の命にかけて誓うが、死神は一時人を捕り損ねても、緩めた投げ縄のようなもので、彼の手に端の輪が握られている限り必ず捕らえる。
- 68- 一体どうしたことだろう。従兄弟のマーリクは、私が近づこうとすると遠くへ離れてしまう。
- 69- 彼は私を非難するが、私には何故なのか分からない。それはクルト・ブヌ・マアバドが部族の中でわけもなく、私を非難するのと同じである。
- 70- 彼マーリクは如何に支援を求めてもことごとく失望させた。まるでわれらが彼を空洞の墓の中に埋めてしまったようだ。(死者は報えず)
- 71- 私は彼に悪口を言った覚えはない。ひとえに兄弟マアバドの迷った荷ラクダを怠りなく探してただけなのに。
- 72- 私は親族にわが身を捧げた。貴殿の幸運に誓って申し上げるが、一度難事が生じたなら、私は敢然とこれに立ち向かうであろう。
- 73- 大事に招かれれば、防ぎ手に加わり、敵が貴殿のもとに押し寄せれば、私は全力でこれにあたる。
- 74- 敵が貴殿を罵り名誉を汚すなら、私は敵に脅かす暇を与えず、死の水槽から死に水を彼らに飲ませてやる。
- 75- 私は何一つ不都合な事件は起こしていないが、事件の張本人として非難され、訴えられ、追放された。
- 76- 私の庇護者が従兄弟のマーリク以外の男であったなら、きっと私の心痛も和らぐか、明日まで私に猶予を与えてくれていただろう。
- 77- しかし、私の庇護者は私を窒息させる男である。たとえ感謝し、へつらっても、あるいは身代金を払って自由になろうとしても同じことだ。
- 78- 親類縁者の暴虐はインド鉄の名剣の一撃よりも身にこたえる。
- 79- さすれば、私の気の向くままにさせてくれ。たとえ私のテントが遠く離れたダルガド山にあらうとも、貴殿に感謝するだろう。
- 80- もしわが主の御意志にかなうなら、私はカイス・ブヌ・ハーリドのような人物になろう。あるいは、もしわが主の御心にかなうなら、私はアムル・ブヌ・マルサドのような人物になるであろう。
- 81- さすれば私は大金持ちになり、貴人や長者の子らが私を目指して訪ねてこよう。
- 82- 私は皆の者が承知の通り、身軽で頑強な勇者で毒蛇の頭のように鋭く動く²⁷⁾。
- 83- 私は諸刃が鋭利なインド鉄の剣を、常に腰に備えると誓った。
- 84- 鋭利な剣、これで私は一度復讐に立ち上がれば、その一撃で事足りる。再度打つ要はない。それは枝切り鎌のようなまくら物ではない。
- 85- 信頼の置ける味方で、倒す相手から逸れることはない。「急がずに」と言われれば、

27) A は「أَنَا الرَّجُلُ الْجَعْدُ 私は頑強な男」、Z は「أَنَا الرَّجُلُ الضَّرْبُ 私は身軽な男」となっている。

切っ先は「手出し無用」とこたえる。

- 86- 各自が武器に急ぐとき、あなたはその剣の柄を握り締めた私が、不敗の勇者であるのを知るであろう²⁸⁾。
- 87- 膝を折って眠っているラクダの群れの多くが、鋭利な剣を抜き放って、私が近づくと、私を恐れて逃げ出した。
- 88- そのとき、たるんだ乳房を下げた大きな老ラクダがそばを通りかかった。それは杖のように痩せこけた老人の宝物であった。
- 89- そのラクダの踝の上と脛が私に切られたのを見ると、老人は「とんだ災難だ。気がつかないのか」と言った。
- 90- 老人は「この酒飲み野郎の始末、どうしたものか。わしらをいたずらに苦しめる我がままな男ですぞ、皆の衆」と言った。
- 91- やがて彼は「まあ許してやろう。殺したラクダはこやつにくれてやる。ご一同が群れから離れて膝をついているラクダを連れ戻してくだされなければ、こやつがさらに殺しますぞ」と言った。
- 92- 端女（はしため）らはラクダの腹から取り出した子を焼き続け、脂肪の多い瘤肉がわれわれに振る舞われた。
- 93- 私が死んだならマアバドの娘よ、私に相応しい褒め言葉で悼みないでくれ。ガウン襟を引き裂いて私にかけてくれ。
- 94- 私の高い志と同じ志を持たない者と同列に悼むな。事件や戦闘での活躍で私に及ばぬ者と同列に悼むな。
- 95- そのような男は大事を前にして鈍感で、悪事にはすぐ染まり、卑劣で、人々の振り拳で追いやられる。
- 96- もし私が人々の目に弱虫と映っていたのなら、仲間多数の者や独り者の危害を受けていたかも知れない。
- 97- しかし、私の大胆さと勇敢さと誠実さとよき家柄が敵を寄せつけなかった。
- 98- あなたの命にかけて誓うが、私は昼間背負った要務はあやふやに放置せず、夜にも先送りしない。
- 99- 多くの日々しばしば、由緒ある血筋を守るために、私は敵との戦いや彼らの脅迫に自らを備えた²⁹⁾。
- 100- 勇者が破滅を恐れる場所で、私は地歩を固めるが、戦闘がそこで始まる時には恐怖のために胸の筋肉が震える。
- 101- 黒く焦げた黄色の占い矢にどれほど多く、焚き火のそばで吉と答えが出るように期待したことだろう。私はその矢をめったに吉と答ええない占い師にゆだねたものだ³⁰⁾。
- 102- 歳月はあなたに知らないことを表し、あなたが今までに糧を与えたことのない者が音信をもたらすであろう。
- 103- あなたが旅装束を買ってやったことのない者が音信をもたらすであろう。あなたがそれを聞くための刻限を決めてやってない者が。

28) 1~3行、21~24行、26~27行、45行、54~60行、66行、78行、82-86行は伴康哉訳があり、大部分はこれによった。

29) 冒頭の **وَبِئْسَ** は Z のように **وَبِئْسَ** と読んで **رَبِّ** の意味でとる。A は **وَبِئْسَ** としている。

30) タラファの気前よさを示す。